

## 40年の活動をもとにたどりついた「パラアート」開催。 障害者の新しい自己表現のカタチを示した。

2009年9月11日～16日に西武百貨店池袋本店の西武ギャラリーで「2009 アジア・パラアート TOKYO」が開催された。世界で初めての障害者の国際美術展である。いわばパラリンピックのアート版である。しかし、主催した財団法人 日本チャリティ協会がここまでたどりつくには長い道のりがあった。

みみずのような線、雑巾のような作品。

20余年前の美術展のレベルはそれが限界だった。

今なら「チャリティ」という言葉は誰でも知っているが、日本チャリティ協会が生まれた昭和41年当時はそうではなかった。「恵まれない人たち」と呼ばれ障害を持つ人々が表に出ることなくひっそりと暮らしていた時代に、弱者への「文化的支援」を目的として発足したのである。

同協会理事長の高木金次さんは当時を振り返って次のように語る。

「その頃、国にはお金もノウハウもなく、生活支援を考えるのが精一杯でとても文化などには考えが及ばない時代でした。また福祉団体はたくさんありましたが、それぞれ異なる障害の支援団体で、大部分が交流もない時代でした。しかし、「文化は医療・施設・生活支援と並ぶ大きな福祉の柱」だというのが私たちの発足時からのテーマです。その実現のために何ができるかを考えました」

そこで、30あまりの福祉団体と連携するかたちで発足したのが日本チャリティ協会であり、真っ先に手けたことは資金づくりだった。その最初の事業が「歳末チャリティショー」である。出演したアーティストがすごい。美空ひばりさんをはじめ、越路吹雪さん、坂本九さんなど昭和の超一流スターがずらりと並ぶ。20年続いたこのイベントは多くの資金を集めた。

「資金集めとともに、福祉というものを社会に知っていただくことにたいへん効果があったと思います。当時の厚生省や東京都、日本赤十字、それにマスコミ各社を



きれいな色彩に驚かされる作品。まるで現代アートのようにだ

巻き込んだ大きなキャンペーンに育ちました」と高木さんは説明する。

こうして得られた資金を福祉団体に還元すると同時に、同協会ではさまざまな事業を展開していった。その一つがカルチャースクールの開講と、東京都と共催した美術展だった。このスクールには相談役として岡本太郎氏や池田満寿夫氏などが参加し、マスコミも大きく取り上げた。しかし、参加したのはわずかに20人。美術展もただ線を引いただけのような絵や雑巾のような作品もあり、美術展というイメージからはまだほど遠いものであった。

### 日本とアジア16カ国から集まった178点は 作品自体で勝負できるほどのレベルだった。

ところが、意外なところから障害者の社会進出の流れは加速していった。パラリンピックである。障害者がアスリートとして参加しメダルを争う様子を目のあたりにした日本人は皆一様に驚いた。一般人も障害者も意識が変わったのだ。

障害者の文化振興はまずスポーツから開花したのである。そして次のステージとなったのが美術だった。東京都が2016年の五輪誘致をしていたこともあり、日本チャリティ協会ではこれを機会として国際的な美術展の開催企画が持ち上がった。それが世界初の障害者の国際美術展「2009 アジア・パラアート TOKYO」



「2009 アジア・パラアート TOKYO」 テープカットの様子

である。

とはいえ、実現までには難航を極めた。世界初ということはどこにもノウハウがない。アジアのどこの国にも障害者のアートを把握しているセクションなどないのが現状である。結局は人づてから人づてに情報を集めていき、国内では各県の福祉団体や行政機関に依頼をするかたちで作品を集めていった。

こうした苦勞の末、国内27都道府県あわせて120点、アジア16カ国から58点の作品が集まってきた。しかも、鋭い感性、色遣い、構成力、テーマ、それぞれの作品にしっかりと主張があり、それは衝撃の美術展となった。

「以前の美術展とはまったく次元の異なる世界でした。障害者が自己表現できるようになったこと、また現代アートによって独自の感性がうまく発揮できる時代になってきたことあるのでしょうか。レベルも高く見応えのある美術展だったと思います」と高木さん。

イベント期間中5,000人の観客が訪れたのだが、そのうちの1,000人がアンケート調査に協力し、それぞれの言葉で賛辞を述べている。アンケート回収率からいって

担当者より



福祉には「友好の輪」の  
拡大が必要です。

財団法人 日本チャリティ協会 理事長  
高木金次さん

福祉で重要なことは「友好の輪」を広げることです。AJOSCのご支援でさらに大きな輪が結ばれたと思います。また貴団体の活動を通じて、他の助成団体とのコラボレーションも考えられます。今後はそうした橋渡しの存在になっていただければ、ますます素晴らしい「輪」を描けるものと信じております。

も、見る人にも大きなインパクトを与えたようだ。「パラアート」という造語もこの1回で定着した。

障害者に新たな生きがいの場を提供しただけではなく、近い将来、出品者の中から著名なアーティストが誕生するかもしれない。40数年にわたる日本チャリティ協会の地道な活動が、ついにしえた成果だった。



開催に合わせて作品をまとめた  
図録やDVDなども製作した



苦勞の末、集まった作品は日本・アジア16カ国あわせて178点